

錬金術の理論と実践 PR30~65

・ヘルクス・トリスマギストスの「エメラルド板」

・錬金術の精意

ヘルクス・トリスマギストス: 古代エジプトにいたとされる人物
ヨーロッパ錬金術の(事実上の)創始者

そもそも錬金術自体が「ヘルクスの術」ともよばれる。

「ヘルクス」はギリシア神話の神、またエジプト神話のトト神やローマ神話のメルクリウスと関連づけられた。

『ヘルクス選集』: 1463年にマルシリオ・フィッチーノのラテン語訳
(実際は1471年に刊行)

これ自体は錬金術の記述がまともでないが、「人間は神性に至ることができると
いう主張がルネサンス期の神秘学の成立に大いに貢献した

実際には『エメラルド板』のほうに錬金術の記述がまとめられている
アラビア語版(ヘルクスの遺体が所持) → ラテン語翻訳

① これは偽りなく、確定で、真実である。

② 下のものは上のものに似ており、上のものは下のものに似ており、
かくして一なるものの奇蹟を行う。
(硫酸 = 水銀理論のこと、またそれを用いて神の所業が再現できること。)

③ すべてのものは一なるものの仲介により造られたように、
すべてのものは一なるものから進出によって造られる。
(四大元素論のこと)

④ 一なるものの父は太陽、母は月である。風は体内部内に宿し地は乳母である。
世界のすべてのものを完成する父がここにいて、それが地になると、その力は全ものとなる。
(大業の三態のこと、および三態 → 賢者の石を得るプロセス)

⑤ 火から地を、粗大なるものから精妙なものを巧みに分離せよ、それは地から天空に
上昇し、再び地に下降し、上位のものと下位のものの両方の力を受けとる。
(錬金術の意味での抽出のこと、および第五元素の言及)

⑥ かくして汝は全世界の栄光を得て、不確定なものは消え去るであろう。

⑦ その力は、すべての精妙なものを超え、すべての固定したものを定めているために
すべてのものに勝る。
(抽出の意味づけ)

⑧ かくして世界は造られた。

⑨ かくして驚くべき進出が生まれるが、その過程はここにおいて示されている。
(天地創造と錬金術は同プロセスである、という主張)

- ⑩ それゆえ、私は全世界の哲学の三つの領域に通じる
ヘルメス・トリスマギストスと呼ばれる。
(自己紹介「トリスマギストス」=3倍偉い、と名乗った理由)
- ⑪ 太陽の作業に関して私がいうべきことは、これがすべてである
(ゆえに「ヘルメスの術」の異名が生まれた)

エメラルド板の文中で「一なるもの」という単語がくり返し出てきたが、
これは文脈判断で直訳し分かる。

……というより、ヘルメスは同一のものが多義・多様に変化することを踏まえて、
おいて「一つのもの」一語で書いた節がある。

後世の錬金術師はこれを精気(スピリトゥス)あるいはアネウマという根源の素材
を仮定して説明しようとした。

ヨーロッパ錬金術は金変成を早々にあきらめて医療・医学へと転換する
その根拠となったのがアネウマの概念で、

「アネウマを生命の中に固定する = 医療する」となった

○錬金術の象徴と記号

神秘学ではよくあることだが書物・資料はモチーフで示されることよくあった
「当時基準では」最先端の技術のため、同業者や門外漢に情報を秘匿)されることになった

・動物による表現

実在/空想の動物と記号として表現。

ドラゴン：有翼なら水銀、無翼なら硫酸 争いは錬金術的反応を表す

ウロボロス：自らの尾をかむ蛇やドラゴンのこと

万物は一なるものがたまに变化して存在することを示す

蛇：十字架にかけられているなら賢者の石の象徴

転じて医療のシンボル

ヒキガエル：毒、ないし水銀のシンボル

ライオン：赤いライオンは硫酸を、緑のライオンは水銀を表す

鳥類：ライオンの対の概念、物質の揮発を示す

不死鳥：賢者の石の象徴、あるいはキリスト

その他、ユニコーン、バジリスク、グリフィンなど……

・リプリー・スクロール: ジョージ・リプリー (イギリス) の名で出版された巻物
 ただし存命時期と出版時期が2世紀ほどずれている
 単に美術品として見ても価値が高い

大衆のついでに (黒化・白化・赤化) をそれぞれ1枚の図案にまとめている。

・記号による表現

太陽系・錬金術の素材・記号が対応せられて使われた、

天体	太	水	金	地(月)	火	木	土
素材	金	水銀	銅	銀	鉄	錫	鉛
記号	☉	☿	♂	♂	♂	♂	♂

また、

硫黄 ♁ 塩 ☉ の三原質 (もう一つは水銀 ☿)

火 △ 空気 ☆ 水 ♀ 地 ▽ の四大元素

が記号として使われる

ただし、記号は錬金術師間で共有されていたが、操作についての記号は
 何の取り決めもなく、図案の解釈については一片一片違う方法で
 見出すことになる。

一応、ヨーロッパ錬金術が成り立ったころには占星術の記法を取り入れて
 解釈を統一しようとした動きもあった

これらの天体は四大元素+エーテルとの対応で、「卵」のアナロジーで
 表現されることもあった、

外から 地 → 空気 → 水 → (薄膜 →) 火 → エーテルの順で、

ヘルメスの卵と呼ばれ、錬金術のフラスコはそのような構造とされる、

ヘルメスの卵は宇宙と同じ構造とされた、

これは (昔であらう考えがなかっただろうが) 鳥が生まれる「卵」と蛇が生まれる「卵」が
 同一視されてあり、同じ「卵」から別の動物が生まれる ⇒ 「卵」の中の
 プリマ・マテリアが分化してそれぞれの動物が生まれるとされた、

さらにそれが飛躍し、「宇宙は全てプリマ・マテリアが分化して生じている
 ← 宇宙はプリマ・マテリアを有する卵から生まれた」という、

逆方向の連想が起きた